

三木市の線路沿いにある喫茶店「しょうよう」で、店主の萩原正典さん(72)と、妻の洋美さん(81)がコーヒーを入れている。洋美さんは約3年前、アルツハイマー型認知症と診断され、なじみ客の名前や顔が思い出せない。

正典さん「コーヒーの入れ方を僕に繰り返し尋ねてくる。今は頭の働きが止まらないうように話しかけている」

——鹿児島出身の正典さんは、生後すぐに両親が離婚。

16歳の冬、再婚した父に「家から出て」と言われて飛び出した。神戸市長田区の中華料理店で働いていた頃、同僚の洋美さんと出会った。

洋美さん「年齢を聞かなかったので、結婚して初めて九つも年が離れているのが分かった。若い頃は楽しかったと思うけど忘れたわ」

正典さん「ガス配送業に転じ、お母ちゃんも助手としてトラックのハンドルを握った。2人で必死だった。19

楽しい今を

喫茶しょうよう

夫と認知症の妻



「けんかはしたことがない。どなたとマスターは笑うから」と話す萩原洋美さん(右)。寄り添う正典さんのまなざしは優しい(三木市志保町広野で)

95年、近くで喫茶店を始めた。昼間は配達、夜は喫茶店。日中はお母ちゃんが1人で店を守った。

——洋美さんの様子がおかしいと感じたのは10年近く

前。元々お酒は好きだったが朝から酒を飲み、自宅の力ギをかけた。洋美さんは否定するが、コーヒーの入れ方が思い出せないことがある。正典さん「お酒の適量が分からなくなったんだらう。代金を受け取らずに客を見送ったことも」

て畑仕事に出て、朝食を準備。デイサービスに向かう洋美さんを見送る。夕方から2人で店に立つ。

洋美さん「人と話をするのが好きだから店は楽しいよ。マスターとは毎日一緒。でも、かわいそうよ。私にどなられて」

——二人三脚でここまでやってきた。

正典さん「とにかくお母ちゃんがいってくれることが大事。今が一番楽しい。お母ちゃんは神様で、この出会いは宝

くじに当たったようなもの」洋美さん「マスターは忘れないよ。どこに行くのも一緒。どうのこうの言わへん。私はこのままでいい」

(近藤修史)

ると、47.9%が家族や親戚、友人らに会えないことをストレスに感じていた。

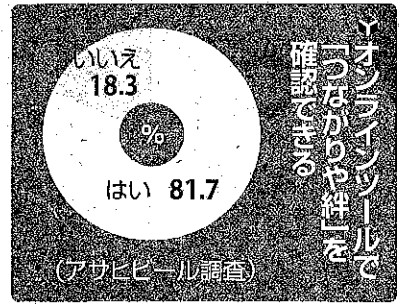
また、アサヒビールが同年6月に実施した調査では、68.5%が「つながりや絆」を大切に感じたと回答。約8割はオンラインで絆を確認できるとしている。

阪南大の武藤麻美・准教授(社会心理学)は「人との自然な接触が困難になったことで、ひとり暮らしの高齢者や学生らは孤独感を募らせた。一方で、周囲の支えを再認識する機会にもなった」と指摘。心の健康のために出来事を日記や手紙に書くなどし、気持ちを言葉にすることをすすめる。

絆再認識の機会に

新型コロナウイルス禍での行動制限は、人と人の距離を遠ざける一方、オンラインツールによるコミュニケーションを促した。

厚生労働省が2020年9月に実施したメンタルヘルス調査によ



——近頃は午前2時に起き